令和８年度

茨城県優良図書紹介【中学生向け】



『真昼にも星が光ると知ったのは』

梨屋アリエ（ポプラ社）

みんなから「変わっている」と言われてしまう主人公が、周囲との関わりの中で自分らしく生きることの意味を模索する物語である。誰もが抱える生きづらさや葛藤に寄り添いながら、他者を認め合うことの大切さを考えさせる作品である。



『君の火がゆらめいている』

落合由佳（講談社）

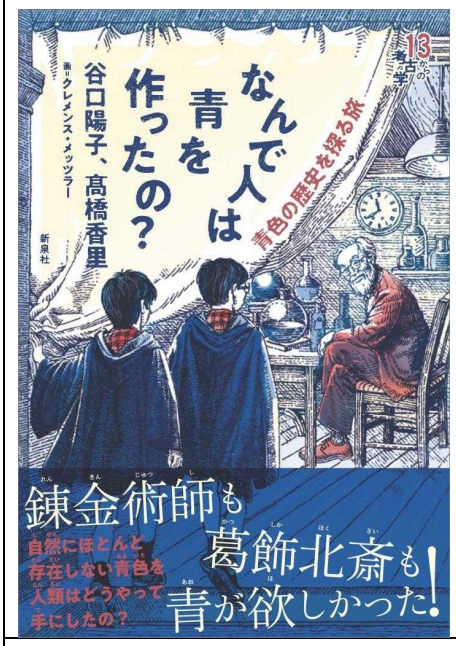
障害のある家族を支える「きょうだい児」の視点から、家族への愛情や葛藤、自分らしく生きることの難しさが描かれている。「良心」とは何か、相手を思いやる心や多様な立場、共生社会への理解を深めることができる作品である。



『わたしの be　書くたび、生まれる』

佐藤いつこ（KADOKAWA）

見た目にとらわれがちな思春期だからこそ、「本当の美しさとは何か」を考えさせてくれる作品である。書道と真剣に向き合う主人公の姿を通して、自分らしさや夢中になれることの大切さを自然に学ぶことができる。自己肯定感や多様な価値観について考えるきっかけとなる一冊である。



13 歳からの考古学『なんで人は青を作ったの？青色の歴史を探る旅』

谷口陽子・髙橋香里/著　クレメンス・メッツラー/画（新泉社）

人類が長い歴史の中で「青」という色を求め続けてきた歩みを、分かりやすく紹介した作品である。天然の鉱物や植物から青を生み出そうとした人々の工夫や挑戦を通して、科学・歴史・文化のつながりを学ぶことができる。身近な色に隠された人類の知恵と探究心に触れることで、物事を多面的に見る視点を育み、知的好奇心を高めるためのよきテキストである。



『ぼくたちの卒業写真』

天川栄人/作　くまおり純/絵（文研出版）

卒業アルバムという身近な題材を通して、「相手を知ること」と「決めつけないこと」の大切さを考えさせてくれる作品である。一枚の写真には、その人らしさや思いが映し出されることに気づき、互いの違いを認め合うことの大切さを自然に学ぶことができる。自分自身や友達との関わりを見つめ直し、多様性や相互理解について考えるきっかけとなる一冊である。



『問題。　以下の文章を読んで、家族の幸せの形を答えなさい』

早見和真（朝日新聞出版）

「家族の幸せの形を答えなさい」という国語の試験問題の答えを模索する主人公、十和が、家族の不和の悩みや、難関中学校への受験に挑む過程を通して、家族、友達へのかかわりを再構築し、家族の幸せの形の解答を見出していくストーリーで、感動的な内容の本である。



『聞こえない羽音』

舟崎泉美（小学館）

突然、耳が聞こえにくくなるという現実に直面した主人公が、デフバドミントンとの出会いを通して再び挑戦する勇気を取り戻していく物語である。障害を受け入れ、前に進む主人公から、他者との関わりにおいて自分が変化することの大切さを伝える一冊である。



『中三・ラプソディ』

花里真希（講談社）

中学３年生の揺れ動く心情が、等身大の視点で描かれている。進路選択や友人関係に悩みながらも、自分らしい未来へ向かって、歩もうとする登場人物の姿に共感するだろう。自分らしい生き方について考えるきっかけとなる作品である。



『ぶたのしっぽ』

海緒裕/作　嶽まいこ/絵（講談社）

自分らしく生きられず、息苦しさを感じている主人公が、職場体験をきっかけに「ヤングケアラー」で「不登校児」のクラスメイト、篠田と知り合い、その後の二人の交流を通じ、それぞれが、勇気をもって自分らしく生きることの大切さに気づいていく物語で、共感をもって読める本である。



『ルッキズムってなんだろう？ みんなで考える外見のこと』

西倉実季（平凡社）

もともとは見た目による差別を表す「ルッキズム」について、社会学を専門とする著者が、身近な事例をもとにしながら、対話形式で分かりやすく解説しており、「ルッキズム」に関する問題を抱えて、生きづらさを感じている中学生にとって、解決の一助となり得る一冊である。



『百十三代目の司書見習い』

スチュアート・ウィルソン/作　児玉敦子/訳（東京創元社）

図書館の本が、とんでもない秘密を抱えて信じられない事件を起こすというストーリーで、ファンタジー好きな読者には、たまらない本である。また、姉たちや謎の少女や猫、友達に助けられながら、謎の殺人事件の犯人探しに奮闘していく物語が、読者に臨場感をもたらす内容となっている。



『自分だけの秘密』

日本児童文芸家協会/編　tabi/絵（フレーベル館）

９人の作家が描くアンソロジー小説で、思春期特有の悩みからくる秘密や、誰にも打ち明けられないような秘密まで、多様な「秘密」を抱える主人公たちが、秘密のために閉ざしていた心の扉を開き、新たな一歩を踏み出すストーリー。短編で読みやすく、いずれの話も、読後にほっこりした感情の残る本である。